

# 平城宮跡・平城京跡の発掘調査

## 平城宮跡発掘調査部

平城宮跡発掘調査部が、1990年度に実施した発掘調査は、平城宮跡内では、兵部省、壬生門北方、式部省、第一次大極殿地区、宮北面大垣、東院地区東辺の6件、平城京域では、17件であった。以下、主要な調査の概要を報告する。

### 1. 平城宮跡の調査

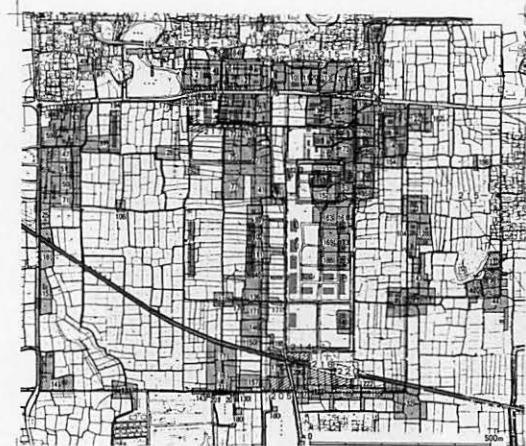
#### 兵部省の調査（第205次，第214次）

兵部省については、これまで第167・175・206次の3次にわたる調査が行われ、全体の構造・変遷が明らかになってきている。第205次調査は、兵部省西第二堂を中心とする兵部省南西部から基幹排水路 SD3715 にわたる地域を調査し、第214次調査は、兵部省の南北規模確定を目的として、その北東隅から北側を調査した。

**第205次調査** 調査区内には奈良時代の整地層が、概ね三層認められる。第一次整地は兵部省区画内の旧低湿地を埋める整地、第二次整地はほぼ調査区全域に及ぶ整地、第三次整地は兵部省区画内の改作に伴う整地である。なお、第一次整地と第二次整地が一連のものか否かについては、今回の調査では明確にできなかった。検出した遺構は、兵部省建設以前と兵部省の時期に大きく分けられる。

**奈良時代前期（兵部省建設以前）** 南面大垣に先行する掘立柱東西塀 SA1765 とその北・南雨落溝 SD13940・13945、南面大垣に先行し SA1765 より新しい南北廊 SC11700 とその東雨落溝 SD13985、そして南北溝 SD12998・13900 などがある。SA1765 は第16・122・157・167・206次調査により、朱雀門の東から壬生門の西まで続くことが明らかになっている塀で、今回は兵部省区域外で、第二次整地土下の古墳時代の遺物包含層上面で7間分検出した。南面大垣の北約

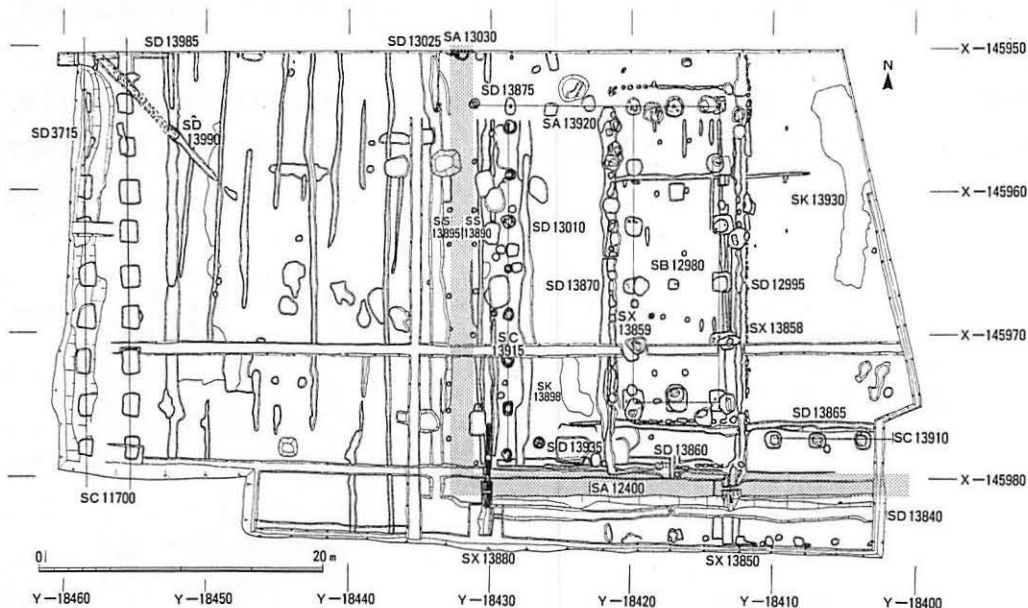
16m にあり、柱間は9.5～10尺。SC11700 は、第157次調査でその西側柱を検出し南北塀 SA11700 としていたが、今回その東10尺の位置に東側柱を新たに検出し、廊であることが判明した。桁行柱間は10尺等間。SD12998・13900 は、それぞれ後の兵部省西第二堂の西・東側柱筋にほぼ相当する位置にあり、兵部省の区画を越えて南流する。第一次整地層の上面から掘り込んでいる。このほか、建物としてまとまらないが、10尺の間隔で南北に並ぶ柱穴 SX13937 を第一次整地層上面で検出した。



1990年度平城宮内発掘調査位置図

奈良時代後期（兵部省の時期） 前・後期に分け

られる。前期の遺構には、兵部省南・西面築地 SA12400・13030とそれに伴う雨落溝 SD13840・13855・13860・13875・13025, 兵部省西第二堂 SB12980とその雨落溝 SD12995・13870, 掘立柱東西塀 SA13920, 暗渠 SX13850・13880がある。後期は、兵部省の基本的な建物の構成に変化はないが、南面・西面築地に片廂廊 SC13910・13915を付け加え、築地雨落溝を SD13865・13010などに付け替える。SA12400は残存基底幅が2.4m, 堰板抜取痕跡から築地本体の幅は1.5mに復原できる。後に SC13910が付設される。SC13910は、兵部省南門以西に設けられる片廂廊。当初の雨落溝 SD13855を第三次整地で埋めて基壇を造成し、礎石を据える。第206次調査の所見からみて、柱間は4間と考えられる。柱間寸法は10尺等間、築地心からの出は3.2m。SD13855はSA12400の北雨落溝で、後に SC13910付設に伴い埋め立てられ（第三次整地）、SD13865に付け替えられる。SA13030は、東・西に添柱列 SS13890・13895が並び、築地本体の幅は1.5mである。後に SC13915が付設される。SC13915は西門以南に設けられる片廂廊。当初の雨落溝 SD13875を第三次整地で埋めて基壇を造成し、礎石を据える。7間あり、柱間は11尺等間、築地心からの出も11尺である。SB12980は南北棟礎石建物で、周囲に溝が巡る。東第二堂と同規模で、桁行5間、梁間2間、柱間寸法は桁行が14尺等間、梁間が10尺等間。基壇の規模は、南北23.1m, 東西9mで、高さ50～80cm程度の玉石積み基壇である。軒の出は、東・西が1.5m, 南・北が1.2m。なお、礎石据付掘形のひとつから、平城宮式鬼瓦ⅡA<sub>2</sub>が出土した。第二堂東雨落溝 SD12995は西第一堂東雨落溝から連続し、暗渠 SX13850へと流れる幅50cmの石組溝。SX13850は、下層南北溝 SD13900の流路をそのまま利用している。木樋の痕跡を残す。SA13920は、西第二堂北妻と西面築地を結ぶ掘立柱東西塀で、東第二堂のそれと左右対称の位置関係にある。4間分



第205次調査遺構図（兵部省）

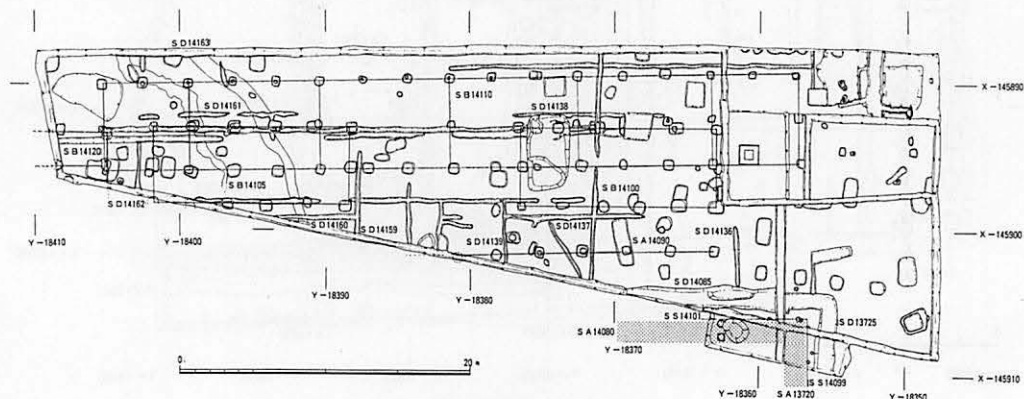
出土した軒瓦の傾向を見ると、6282G-6721F と 6225C-6663C のセットが多く、これまでの調査で確認された傾向とほぼ一致している。

まとめ 今回の調査では、南面大垣に先行する SA1765 など、平城宮造営当初に遡る下層の遺構を確認したが、上層の兵部省西第二堂に対応するような明確な下層遺構は確認できず、奈良時代前半の兵部省がこの地になかった可能性が高い。また、兵部省西側の SD3715 までの地域は、奈良時代を通じて役所の区画としては利用されていない。

兵部省の区画塀北東隅を検出し、兵部省の南北規模を確定した。また、兵部省と朝集殿院の間にあり、通路状の地域で建物の存在を確認した。調査区の土層は、古墳時代の遺物包含層の上に2層の奈良時代の整地層が認められ、それぞれの整地層は第205次調査の第一・第二次整地層に相当する。ほとんどの遺構は第二次整地層の上面から掘り込んでいる。主な遺構には、兵部省北・東面築地とそれらの北・東雨落溝、築地添柱列があり、また兵部省の区画外では4棟の掘立柱東西棟建物がある。このほかに溝15条、自然流路2条、塀2条、土坑などがある。これらはA～D期の4時期に分けられる。

**B 期**（奈良時代初期）掘立柱建物 SB14120がこの期に属する。第一次整地層の上面で検出しており、C 期の遺構より古い。建物の北東隅の 4 本の柱穴を確認したのみで、全体の構造は不明。東西方向の柱間は11尺、南北方向の柱間は8 尺である。

**C 期（奈良時代前期）** 兵部省区画外において、同規模の掘立柱東西棟建物 SB14100・14105が、柱筋を揃えて東西に並ぶ。建物の規模は桁行 5 間、梁間 2 間、桁行・梁間方向とも 9 尺等間である。周囲には雨落溝が巡る。後に、SB14105が火災に会い、ともに撤去される。SB14105の柱



第214次調査遺構図（兵部省）



遡る兵部省の遺構は確認できず、奈良時代前半の兵部省の所在については今後さらに検討する必要がある。

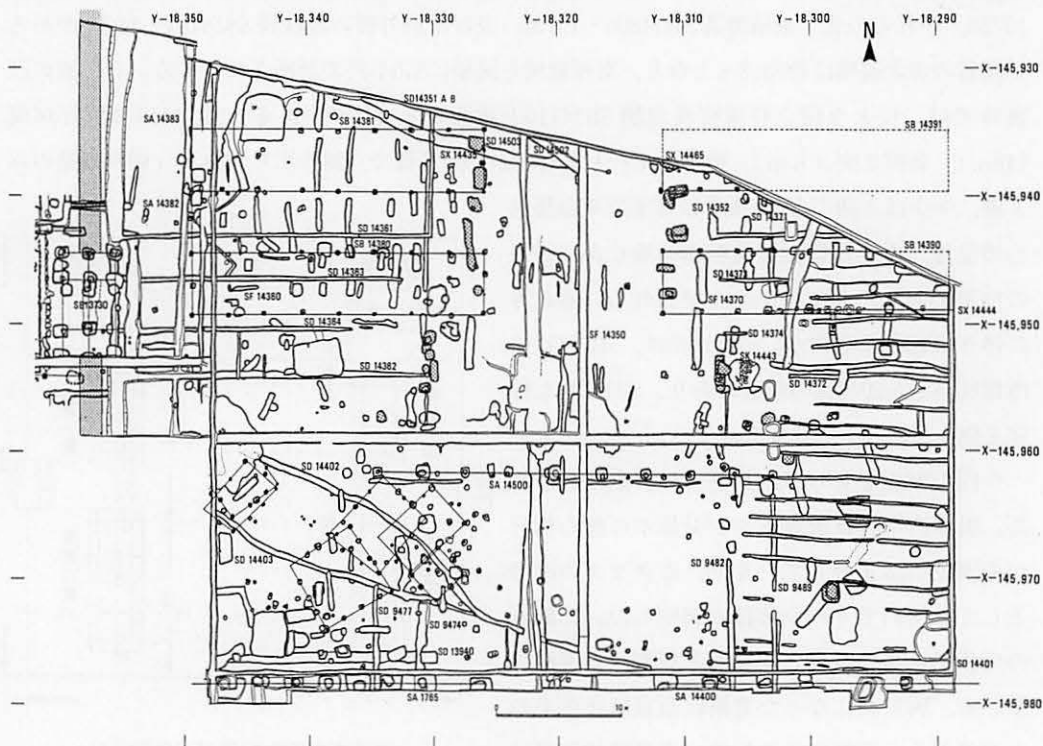
### 壬生門北方の調査（第216次）

壬生門とその近辺については第122次調査がなされている。今回はその北方で、兵部省東門と後述する式部省西門にはさまれた地域を中心とする。調査区内には、奈良時代の整地層、古墳・弥生時代の遺物包含層が認められ、遺構は兩層の上面で検出した。遺構には、掘立柱建物10棟以上、掘立柱塀3条、凝灰岩切石列1条、宮内道路3条、儀式的旗竿用のものと見られる柱穴、多数の溝、土坑などがある。遺構は、A～D期の4時期に分けられる。

**A期** 平城宮造営以前。斜行溝 SD14402・14403・14502・14503、古墳時代の掘立柱建物 SB14384～14389などがある。

**B期** 平城宮造営時。南面大垣に先行する東西塀 SA1765・14400により平城宮の南縁を閉塞する。壬生門の北にあたる部分は通路としてあいており、東西塀 SA14500が目隠し塀となる。SA1765は、東端が壬生門東西中軸線の約8m西方に位置し、柱間寸法は2.85m、SD13940・9470が南・北雨落溝となる。SA14400は壬生門東西中軸線に対して、SA1765と対称の位置にあり、柱間寸法は2.7m、SD9480・14401を南・北雨落溝とする。さらに東方に続く。

**C期** 奈良時代前半。SA1765・14400・14500を撤去し、壬生門から朝集殿院に宮内道路 SF14350を通す。掘立柱東西棟建物 SB14380・14381・14390・14391は、この時期の仮設建物で



第216次調査遺構図（壬生門北方）



あろう。宮内道路 SF14350は SD9482・14352, SD9474・14351を東・西側溝とし、幅は側溝心々で約25m。SB14380・14381・14390・14391は同規模の建物であり、SF14350の中軸線に対して左右対称に2棟ずつ南北に並ぶと考えられる。規模の分かる西側のSB14380・14381では、両棟の間隔が16尺、柱間は桁行が8間、梁間は東妻が3間、西妻が2間、柱間寸法は桁行が10尺、梁間が西妻で8尺である。2棟の建物の西妻をSA14382がつなぐが、さらにSB14381の北へSA14383が延びており、北方調査区外にもう一棟存在する可能性がある。

**D期** 奈良時代後半。宮内道路 SF14350の側溝をSD9477・9485につけ替え、道路幅を広げる。また、兵部省の東門に通じる宮内道路 SF14360、式部省へ通じる宮内道路 SF14370をつくる。SF14350は、調査区南半では幅が約3.3mに広がるが、SF14360・14370の北ではC期の道路幅と変わらない。SF14360・14370はA・Bの二時期があり、幅がA期では約4m、B期には約11mに広がる。SF14360Aは兵部省東門SB13730A（棟門）に伴う道路で、SF14360Bは同じくSB13730B（八脚門）の時期のものである。SF14370A・BはそれぞれSD14373・14374, SD14371・14372を南・北側溝とする。このほか平城宮の時期の遺構として、儀式の旗竿用の柱穴と見られるSX14420～14435・14450～14465がある。これらは、SF14350の中軸線に対して東西対称に並ぶ。柱穴相互の切り合いから見て、数回の儀式があったとみられる。

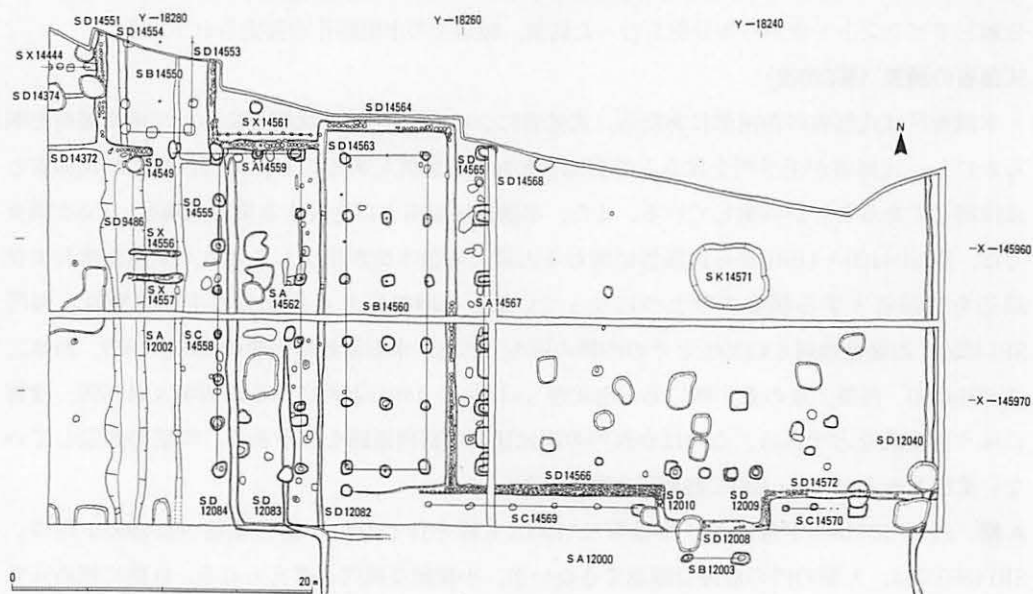
**まとめ** 今回の調査では、平城宮造営以前の遺跡、平城宮造営時遺構の壬生門北方の変遷、利用状況が明らかとなった。仮設建物、旗竿用の柱穴などが見つかったことは、ここがなんらかの儀式に利用されたことを示し、朱雀門北方の広場とは若干異なる利用形態をもっていたといえる。なお、今回の調査では弥生時代の遺物として、サヌカイト製の石鏃、石包丁（片岩製）、磨製石剣などが出土した。また、調査区北壁の土層について、宮崎大学農学部、藤原宏志氏に依頼してプラント・オパール分析を行った結果、周辺での水田稲作が推定されている。

#### 式部省の調査（第220次）

本調査区は式部省の西南部にあたる。式部省については、第165次調査において南面築地を明らかにし、式部省が壬生門をはさんで兵部省と対称の位置にあること、東西の規模が兵部省とほぼ同じであることが判明している。また、本調査区東南方に近接する第32次補足・155次調査では、溝SD4100・11640から式部省に関わる大量の考課木簡が出土しており、本調査地および周辺を式部省とする根拠のひとつになっている。今回検出した式部省の主な遺構は、西門SB14550、西面築地塀SA12002とその内側の廊SC14558、南面築地塀内側の廊SC14569、西第二堂SB14560、西第二堂の東・西にある南北塀SA14562・14567と西にある東西塀SA14559、建物に伴う雨落溝などである。このほか西門の西に延びる宮内道路などがある。時期の確定していない遺構もあるが、A・Bの二時期に大別できる。

**A期** 西門SB14550が棟門で、築地塀SA12002も廊を伴わない。礎石建物SB14560が建つ。SB14550では、A期の門の痕跡は確認できないが、小規模な棟門が考えられる。B期に埋め立てられる南北溝SD14554が、この門の西雨落溝であろう。SA12002は、その東・西雨落溝

**B 期** 西門は礎石建ちの八脚門となる。西面築地の内側に片廂廊 SC14558を、南面築地内側に片廂廊 SC14569・14570を設ける。SB14560は存続し、門の周囲、礎石建物の周囲などを石組の排水溝が巡る。西門は SD14554を埋め立てて門の基壇を作り、周囲に石組溝（SD14551・14549・14553）が巡る。東・西の石組溝の心々間は7.2m（24尺）。対称の位置にある兵部省東門と同規模とみれば、門は桁行3間、中央間3.9m（13尺）、両脇間2.1m（7尺）、梁間2間、柱間2.1m（7尺）。SB14560の基壇周囲をめぐる溝は、北と東は人頭大の自然石を使って底石・側石を組む。西の SD12082は現状では素掘溝であるが、2箇所丸瓦が凹面を上にして据えてあるので、もとは丸瓦を利用した溝かもしれない。SD14553と SD12082は、石組溝 SD14563がつなぐ。廊 SC14558は、築地心からの出が3.6m、柱間は10尺。7間分検出したが、南は削平されており、あるいはもう1間南に延びるか。築地東雨落溝は SD12084に付け替える。SC14569・14570は南門の両わきにある廊で桁行5間、柱間は3m（10尺）。SC14570は、削平が著しい。SD14566・14572は SC14569・14570の北雨落溝。石組で、SD14565と連続する。SD14566の西端は SC14569の西端と揃う。SD14372は、八脚門の西に延びる宮内道路 SF14370の南側溝であろう。出土遺物は、軒瓦では6282G-6721Fのセットがやや多く、これは兵部省でも見られる組み合わせである。このほか、硯が比較的多く出土し、また墨書土器の中に「式」と記すものが1点ある。



第220次調査遺構図（式部省）

まとめ 調査の結果、式部省と兵部省の共通点が多く明らかになった。兵部省東門と式部省西門は同規模で、壬生門をはさんで対称的位置にある。また、式部省西第二堂は西面築地から14.8m東に建物の南北中軸が、南面築地から26.6m北に北側柱がきており、兵部省東第二堂と同一の配置計画をしている。さらに、遺構変遷の上でも、西門が棟門から八脚門へ、築地堀から片庇廊付の築地堀へというように、兵部省との共通性が強くうかがえる。

#### 第一次大極殿地区の調査 (217次)

第一次大極殿地区の整備のため、大極殿前面を東西に走る旧構内道路を撤去することになり、道路敷部分を中心に幅8～41m、東西171mにわたって調査を行った。調査地は、同地区の東西両面の築地回廊部、大極殿両翼の斜道、および斜道に挟まれた広場にあたる。第一次大極殿地区については、既に第27・41・69・72・75・77・87・117次調査が行われ、その成果は『平城宮発掘調査報告ⅩⅠ』にまとめられている。さらに、西面築地回廊部分について、第192次調査を実施している。これらの調査によって、本地区は大きく3時期(第Ⅰ～Ⅲ期)の変遷が確認され、Ⅰ期はさらに4小時期に、Ⅲ期は2小時期に分けられている。今回の調査では、これまでの調査により明らかにされた遺構配置・変遷を再確認した。また、調査区西端部では地山上に1m以上に及ぶ整地を行っていることが確かめられるなど、これまでの調査成果を補足する資料が得られた。さらに、平安時代末～鎌倉時代の鋳銅工房や近世墓など、本地域の後世の状況を部分的ながら明らかにすることができた。今回検出した主な遺構は、第一次大極殿地区の東・西面築地回廊、門2棟、堀4条、掘立柱建物5棟、溝8条、土壇12基、それに铸造炉跡群などである。

#### 宮北面大垣の調査 (第215～6次)

平城宮の北面大垣の調査は、これまで第23・34・161-1・174-16・191-4次調査などがあり、築地堀や前身の掘立柱堀を検出している。本調査区は北面大垣の西端近くにあたり、近世以降の破壊が著しいが、北面大垣 SA2300とその北雨落溝、およびその前身掘立柱堀 SA2330を確認した。SA2300は、版築の築地積土が厚さ0.4mほど残り、うち0.2mほどが掘込み地業である。築地の南端は調査区外。雨落溝は築地の北約1.0mにある。幅約1.1m、深さ約0.4m。丸・平瓦が出土した。SA2330は柱掘形を2個検出したにとどまる。柱間は10尺。

#### 東院地区東辺の調査 (第215-7次)

法華寺町の集落西辺でA・Bの2調査区を設けて発掘調査を実施した。平城宮東院地区の東端部にあたる。平城宮東面大垣は本調査区の東約8mの位置に想定できる。調査区は、厚さ約10～15cmの表土の直下が暗黄褐色粘質土の奈良時代の整地土、および黄褐色砂質土の地山となり、これらの上面で南北棟建物 SB13620A・B、南北堀 SA13630を検出した。SB13620A・Bは桁行3間以上、梁間3間、西廂付掘立柱南北棟建物で、柱間寸法は桁行、梁間、廂の出ともに10尺等間で、ほぼ同位置で建て替えられている。

(小池伸彦)





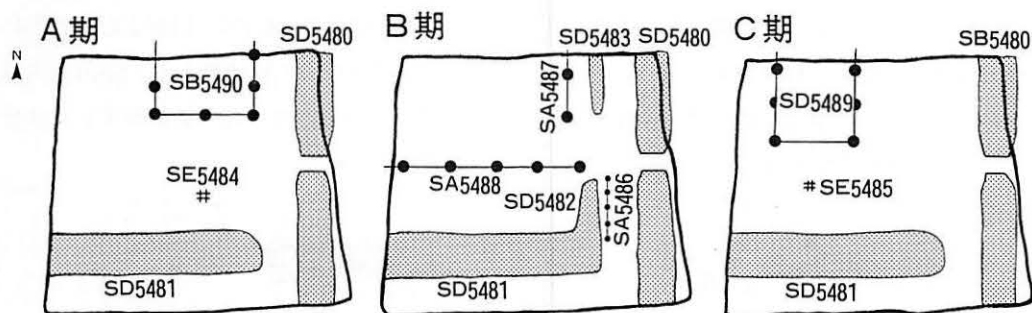
## 平城京の調査

**左京二条三坊六坪の調査 (215-1次)** 国道24号線に南面する事務所建設に先立って実施した発掘調査である。六坪の東南隅にあたり、東三坊坊間路、二条条間南小路の側溝をはじめ、掘立柱建物2棟、掘立柱塀3条、井戸2基などの奈良時代の3時期にわたる遺構を検出した。

A期は奈良時代初期、B期は奈良時代前半～中頃、C期は奈良時代後半に属する。東三坊坊間路西側溝(SD5480)は3時期ともに基本的に北から南に流れ、六坪東南隅部付近に木製の橋を掛けて坪内と東三坊坊間路との往来を可能とする。二条条間南小路北側溝(SD5481)は3時期ともSD5480とは合流せず、B期のSD5483のみSD5480の西方約2.5mで北に折れ曲がる。

A期とC期は坪の東南隅にそれぞれ南北棟SB5490、SB5489を建て、南妻のさらに南に井戸SE5484、5485を1基ずつ配置する。A期の井戸SE5484は井戸枠が抜き取られて残らないが、C期の井戸SE5485にはスギの板材を二重に回した縦板組円筒形の井戸枠が遺存し、上端を大きな自然石が取り囲む。SE5484からは自然釉のかかった美濃古窯群の製品と目される土器をはじめとして平城宮土器編年I期の土器が多量に出土し、SE5485の底部からは和同開珎、萬年通宝、神功開宝などの銅銭15枚、埋土上層から10世紀初頭の土師器片が、それぞれ出土した。それ故、SE5484は平城遷都後の短期間のみ存在し、SE5485は奈良時代後半から10世紀以降に至る比較的長期間にわたって存続したことが明らかである。

これに対してB期は東三坊坊間路と連絡する端の部分を開口部として、敷地外周を囲む掘立柱塀が道路側溝と平行して建つ。SA5488はSD5481との間に約4.2m幅の空閑地を設けて建ち、この端地ともいべき空間の東を閉塞する施設としてSA5486が建つ。

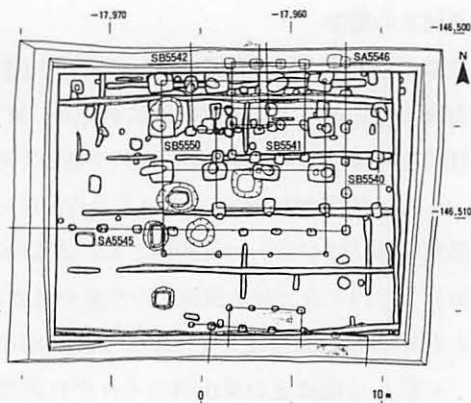


第215-1次遺構変遷図

**左京三条二坊四坪の調査 (215-16次)** 四坪の中央やや東南部における店舗付共同住宅新築工事に先立つ発掘調査である。厚さ約1.0mの現代の盛土の下に厚さ約40cmの旧水田耕作土とその基盤土があり、奈良時代の遺構はその直下の地山上面で検出した。検出遺構は奈良時代の掘立柱建物6棟、掘立柱塀3条と、それ以後の水田耕作に伴う素掘溝、粘土採掘土塋などである。

遺構はL字形の塀SA5545、5546の存在する時期と、これを廃絶した後の時期に大別できる。SA5545、5546に伴ってSB5542からSB5541に建て代わる2小時期と、SA5545、5546の廃絶後にSB5540からSB5550に建て代わる2小時期を各々想定することができる。SA5545が四坪四周の

道路側溝心を基準として坪を南から1/4に分割する線上に位置するため、この東西塀は四坪を小規模な宅地に細分するための分割施設と考えることも可能である。しかし一方ではDA5546が同様の手法で算出される坪中軸線から東へ80小尺の位置に存在することから、L字形の塀が四坪全体を1宅地として占有する1町班給宅地の中核部を囲む塀とも考えられる。

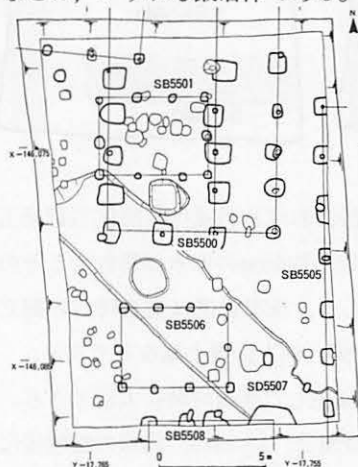


第215-16次調査遺構図

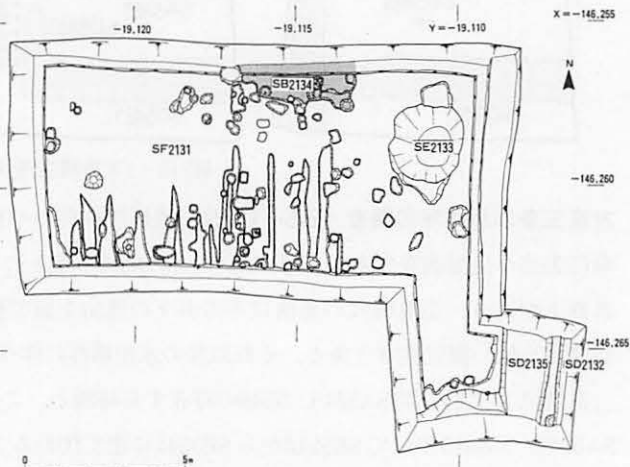
**左京三条二坊九坪の調査 (215-3次)** 九坪の北西部における調査である。検出遺構は奈良時代の

掘立柱建物6棟、井戸1基、古墳時代の溝1条などで、一部奈良時代の土器片を多く含む整地土(「美濃国」の刻印のある須恵器杯B出土)上面で検出したものもあるが、大部分は地山上面で検出した。古墳時代の溝SD5507(深さ40cm)は西北から東南に流れ、布留式土器を多量に出土。奈良時代の遺構は重複関係、出土遺物がともに無いため遺構変遷は明確でない。

**西一坊大路の調査 (215-4次)** 阪奈道路と県道奈良大和郡山斑鳩線との交差点に面する店舗建設に伴う調査である。現代の盛土の下に旧水田耕作土とその基盤土があり、さらに下に12世紀遺構の耕作基盤土・整地土が2層あって、現地表下1mで地山に達する。奈良時代の遺構として西一坊大路東側溝SD2132の西肩を調査区東端で検出した。この上層に12~13世紀の瓦器を埋土中に含む井戸SE2133や南北に走る旧水田耕作溝13条などがある。さらに上層整地土上面にて14世紀以降の小鍛冶工房に関連する遺構を検出した。竪穴状建物のSB2134は円形または方形に竪穴を掘り、周囲に柱を10本前後めぐらせる簡単な差しかけ程度の工房跡である。SB2134内部から出土した炭、鉄滓、西一坊大路東側溝SD2132に重複するSD2135から多量に出土した鉄滓などは、いずれも鍛冶滓である。

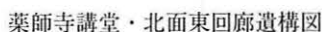


第215-3次調査遺構図



第215-4次調査遺構図

講堂の基壇外装は壇上積である。南北両面に凝灰岩製地覆石列を検出し、特に北面の地覆石上面には羽目石を受ける仕口が部分的に遺存する。これによって講堂基壇の南北長は22.5m(76尺)、平側における底側柱心からの基壇の出は11尺となる。基壇東端の外装石材はすべて抜き取られており、講堂基壇土の下がりを検出したのみである。この基壇土の下がりの中央下端



部に、凝灰岩製切石1石が後世の攪乱を受けずに据え付け当初の位置を保持して遺存していた。この切石は講堂妻側柱心からほぼ11尺東に位置しているため、講堂の基壇の出を平側・妻側とも同値と考えるなら、基壇東端の外装石材が遺存したものと考えることができる。しかし、後述するように北面東回廊の複廊に伴う基壇は上り勾配で講堂基壇に取り付くことが想定されるから、この切石は講堂・回廊の完成後には両基壇土内に埋まることになる。ひとつの解釈の方法として、回廊基壇の建設は講堂基壇完成後に実施され、その際に講堂基壇東端の外装石材が回廊基壇土内に埋まったものと見ることができる。もう一つは回廊が天禄年間の火災で消失した後に、基壇上面の削平に伴って旧講堂基壇東端を押さえる縁石として設置されたとする見方である。現状では両者のいずれとも決し難く、回廊の建設計画が単廊から複廊に改められているという既往の調査成果ともからめて、今後検討していく必要があろう。

講堂外周の雨落溝は、講堂北面と北面東回廊が講堂に取り付く南入隅部の2箇所において検出した。前者は小礫を幅約60cmの帯状に敷き詰めたもので、後者は幅約60cmの素掘溝の西肩に側石の一部とみられる凝灰岩の破片が遺存する。

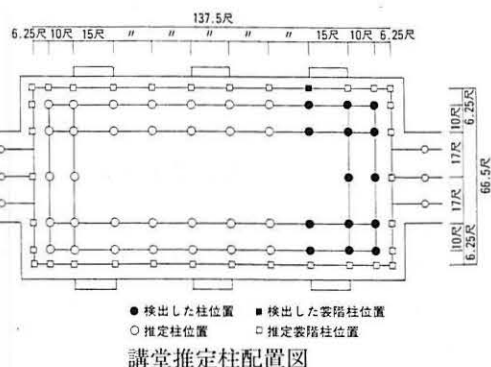
講堂身舎端間に対応する基壇南北両面に石階の痕跡を検出した。いずれも凝灰岩製の第1段目踏石が部分的に遺存する。出は北面が0.7m、南面が1.1mである。両者ともに講堂の地覆石が背面を貫通するため、講堂基壇外装工事完了後に石階を付加したことが明らかである。1969年の調査では北面中央にも石階の痕跡を検出しており、石階は南北両面の身舎中央間および両端間に設けられたものとみられる。北面東の石階のさらに北には食堂方面に連絡する玉石敷の通路がある。上面を10世紀以降の土器片を含む整地土や天禄年間の火災を示す焼土層が覆い、この通路が天禄4(973)年の講堂焼失以前のものであることを示す。同様の通路は1969年の調査時に北面中央間の石階の北側においても検出している。また、石階地覆石と雨落溝との関係は攪乱が著しく明らかにできなかった。

北面東回廊は複廊と単廊の遺構を検出し、回廊建設計画が単廊から複廊に変更されたとするこれまでの調査成果を再確認した。後世の削平を免れた西半部における単廊の礎石据付穴は、複廊建設時に積み足した基壇土に覆われている。削平されている東半部では6対、5間分の単廊の礎石据付穴を複廊礎石据付穴と同一面で検出した。柱間寸法は桁行12.5尺等間、梁間12.5尺で、北面東回廊(単廊)東北入隅から講堂裳階妻に取り付くまでの総柱間数を10間とする。

複廊の礎石据付穴は東面回廊と取り付く東北入隅部から西へ7間目までを検出し、基壇土の残りのよい6・7間目には礎石抜取穴も同時に検出した。柱間寸法は桁行13.5尺等間、梁間2間を10尺等間とする。これより以西、講堂裳階妻との取り付け部までの26尺の中間に存在したと思われる礎石据付穴・抜取穴は削平されて残らない。おそらく複廊回廊基壇はこの区間において上り勾配で講堂基壇に取り付いていたものと推定され、回廊基壇の削平にともなって礎石据付・抜取穴が失われたものと考えられる。北面回廊が講堂に取りつく部分は、南面回廊が中門に取り付く部分と同様に、回廊の桁行柱間寸法をやや短くして調整していることがうかがえる。



単廊に伴う基壇外装の痕跡はない。複廊の基壇外装は北面の2箇所において地覆石列を検出した。南面では部分的に玉石を用いて改修した痕跡がある。基壇の南北幅は約10m（34尺）で、複廊側柱心からの基壇の出は7尺となる。複廊に伴う雨落溝は攪乱されて遺存状況が不良だが、北面の一部に改修時のものと思われる玉石の底石列と外側石列とを検出した。

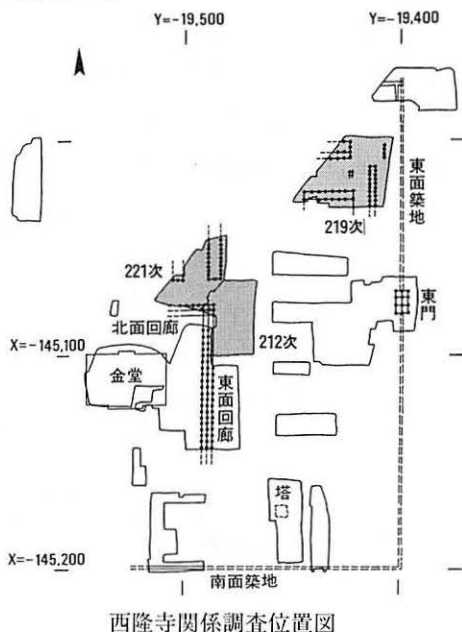


講堂の創建年代を示唆する遺物として、講堂礎石据付穴から出土した軒丸瓦6703Cがある。瓦編年から講堂は天平10年以降に造営を開始したことになり、その完成はさらに遅れることとなる。瓦編年に従って講堂の完成時期を恭仁京遷都以降の時期とするのか、それとも瓦編年を再考すべきかは、今後の検討課題である。

**西隆寺旧境内の調査（212・219・221次）** 212・219次調査は近鉄百貨店の増床計画，221次調査はその北側を近鉄西大寺駅から東北方向に貫通する都市計画道路用地における調査である。

212次調査区北半部と221次調査区の全域では旧水田耕作土とその基盤土の直下が地山および奈良時代の整地土となり，この上面で西隆寺金堂を囲む回廊の東北隅部と北面回廊の北側柱列，回廊北側に建ち並ぶ掘立柱建物群，井戸などを検出した。212次調査区の南半部の大半は後世の水田耕作に伴って削平されており，奈良時代遺構の遺存状況は良好でない。また212次調査区北端と221次調査区東南付近では縄文時代の流路（SD440）を，212次調査区南辺では古墳時代の掘立柱建物（SB441）と掘立柱塀（SA442）を，それぞれ検出した。

**212・221次** SC450は西隆寺北面東回廊，SD445は東面回廊（SC300）の東雨落溝の一部，SX446は東面回廊基壇を横断してSD445に連続する暗渠の一部である。削平が著しいため回廊の基壇外装痕跡はまったく残らず，SC450の各柱位置に薄くレンズ状に残る礎石据付掘形を計11個検出したのみである。とりわけ回廊東北隅中央の礎石据付掘形の底部から，土師器甕Aが正位の状態で出土し，甕内部の充填土から和同開珎，萬年通宝，神功開宝各1枚，錢文不明錢2枚が出土した。錢貨周辺土壌の脂肪酸分析の結果から，この土師器甕が胞衣壺として使用されたことが推定できるが，西隆寺回廊建立に伴って埋納された地鎮具である可能性もきわめて高い。また，SC450北側にはSC450廃絶に伴う瓦投棄土壌が東西方



向に点在する。

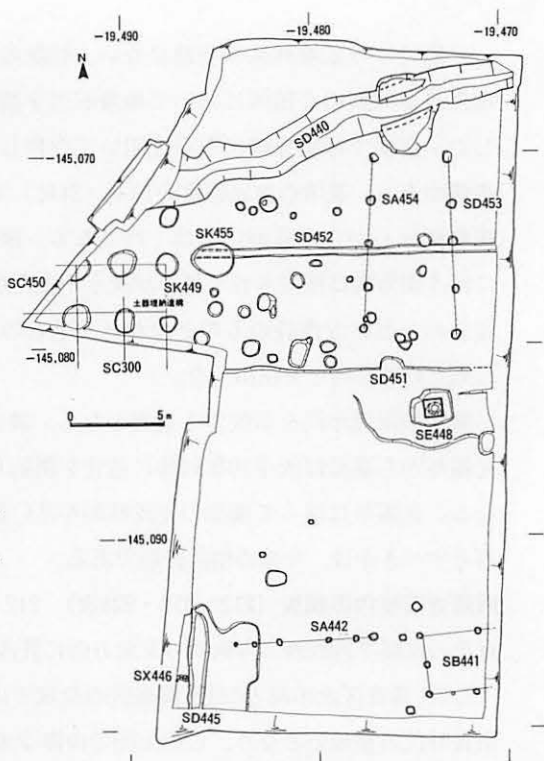
SD451, 452は素掘東西溝で、西隆寺造営以前の右京一条二坊九・十坪坪境小路の両側溝である。両側溝心々間距離は約6mで、中軸線はSC450棟柱通心にはほぼ合致している。既に1972年の調査でも、西隆寺金堂中軸線が西二坊坊間路心と揃うことを確認しているから、西隆寺の伽藍配置計画が寺院造営以前の条坊道路の位置を基準としていたことがうかがえる。

SC300東方の奈良時代の遺構には小規模な井戸SE448や、やや方位の振れる2条の掘立柱塀SA453, 454があるが、西隆寺に伴うものか否かは不明である。

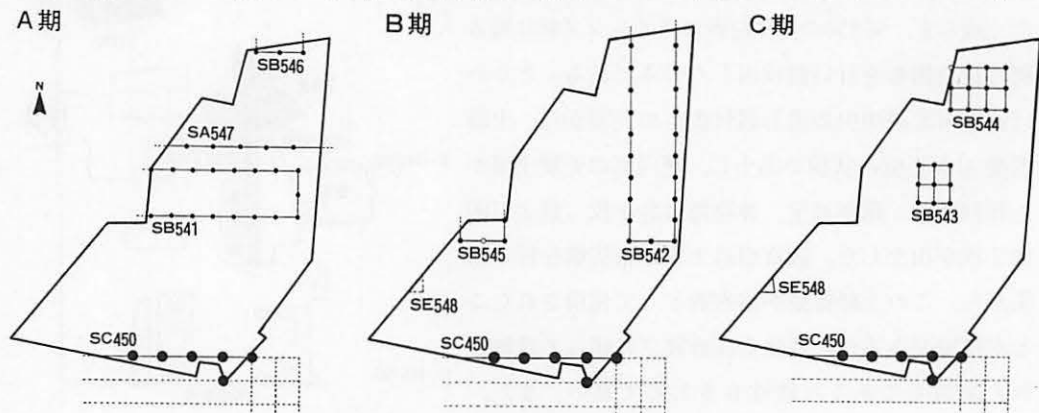
これに対してSC450の北側には、これに伴う遺構として3時期に区分できる掘立柱建物群や掘立柱塀などを検出し、西隆寺主要伽藍北側に接する空間の利用形態の変遷を明らかにすることができた。

A期のSB541は長大な東西棟で、柱掘形から平城宮土器編年Ⅲ以前の土師器杯底部、柱抜取痕跡からⅢ・Ⅳの土師器皿、土師器杯がそれぞれ出土したため、奈良時代後半の西隆寺の尼坊にも比定し得る。B期の南北棟からの出土遺物はなく時期比定が困難であるが、C期の総柱建物SB544の柱掘形からは9～10世紀の土師器杯が出土し、平安時代前半まで存続した主要伽藍の北側に倉庫などの建ち並ぶ空間として利用されていたことを示す。

なお221次調査区西端付近に想定される講堂の遺構はその片鱗すら検出することができず、代わって井戸SE548を検出した。井戸枠据付掘形と枠内埋土から平城Ⅶの土器が出土したため、B期



第212次調査遺構図



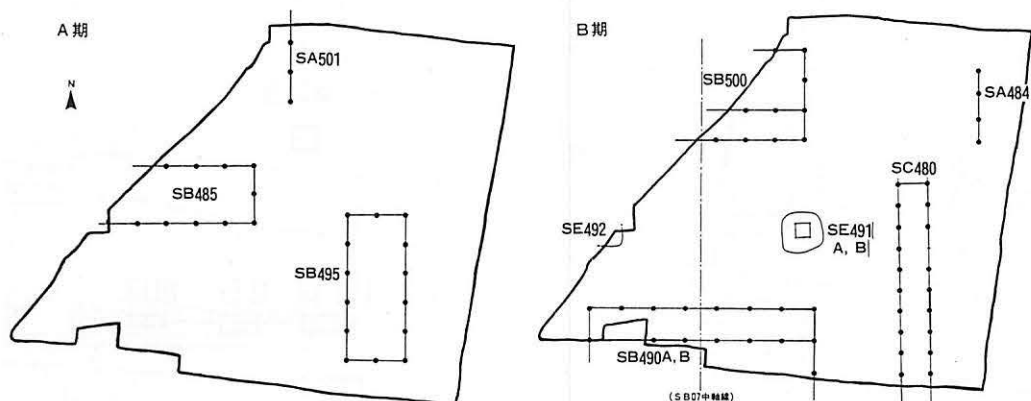
第221次調査遺構変遷模式図

およびC期に属するものとみられる。なおSE548は推定講堂の東北に接して位置し、今後講堂の位置や規模、存続年代を探る上で重要な鍵を握る。

**219次** 左京一条二坊九坪内で、西隆寺造営以後は寺域の東北隅にあたる。奈良時代の遺構は、主として旧水田耕作土とその基盤土の直下に堆積する古墳時代の遺物包含層および調査区内を北から東南方向に流れる奈良時代以前の斜行大溝（SD493）の砂層上面において検出した。

遺構は奈良時代前半～中頃（A期）と、後半および平安時代（B期）の2時期に大別できる。A期の遺構には、SB485（東西棟、桁行4間以上、9尺等間、梁間2間、9尺等間）、SB495（南北棟、桁行5間、9尺等間、梁間2間、9尺等間）の掘立柱建物2棟と、SA501（2間以上、9尺等間）の掘立柱南北塀がある。いずれも西隆寺造営以前にさかのぼる九坪内の宅地の遺構である。B期は西隆寺主要伽藍とほぼ時期を同じくして成立した建物群で、計画的な配置理念のもとに建設されている。長廊状建物SC480（桁行9間以上、6.5尺等間、梁間1間、9尺等間）は礎石建ちで、9間目以北を検出していないがさらに北へのびる可能性もある。尼僧の住坊のような施設であるか、あるいは寺域西北隅に形成された一院の外郭施設としての単廊となるかはにわかに決し難い。SB490A、Bは桁行7間の北廂付東西棟（桁行10尺等間、廂の出10尺）で、当初掘立柱構造であったもの（SB490A）を後に礎石建ち（SB490B）に改めている。この改築はSB490がかなりの長期間存続したことの証左である。類例手法を法隆寺伝法堂に見ることができることから、SB490Bは一般的な住宅建築というより仏堂的性格の濃いものといえる。SB500（桁行3間以上、9尺等間、梁間3間、9尺等間）は南廂付の東西棟で、桁行を7間と仮定するとSB490と中軸線を揃える。またSB500東妻柱筋南方の井戸SE491と調査区西端の井戸SE492とは広場を挟んでほぼ左右対称形に配置される。SE491の上限は掘形埋土から出土した緑釉陶器片から9世紀後半代と考えられ、下限は井戸枠採取穴および枠内底部から出土した黒色土器などの良好な一括資料が薬師寺西僧房床面土器よりやや新しいことから10世紀末とみられる。これはB期の終末が10世紀末であることを示し、史料に記す西隆寺の存続時期とまさしく一致する。

またSE491の枠板は扉の転用材であることが判明した。材は4枚からなり、上半部は腐朽する

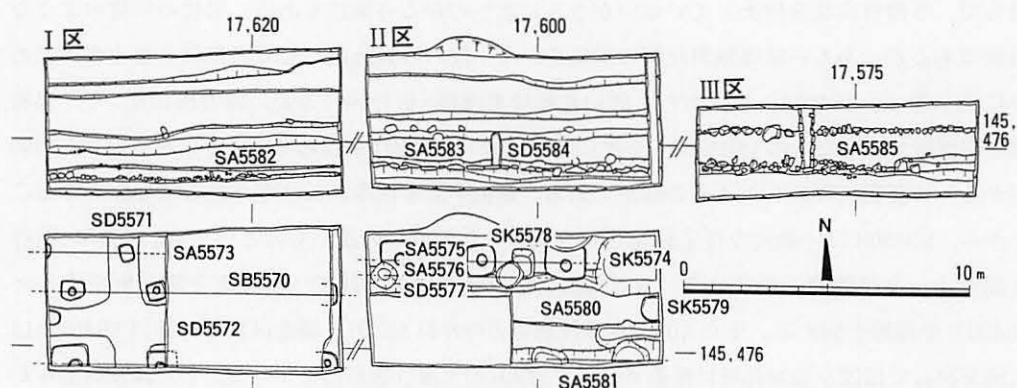


第219次調査遺構変遷模式図

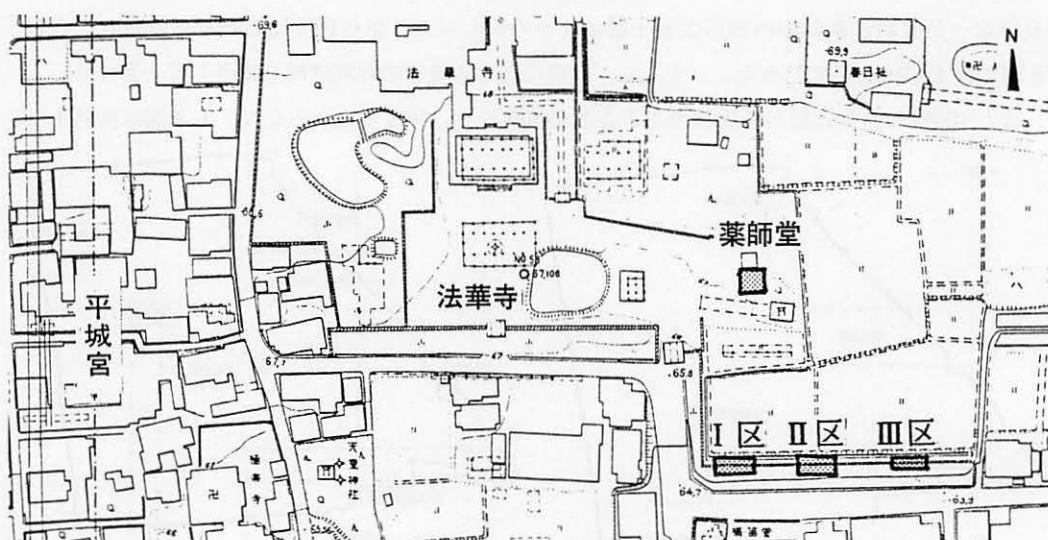
が下半部は幅・厚ともに完存する。うち2枚は同規格の1枚板で、軸部、木口に埋め込みの端喰を持ち、法隆寺五重塔所用の扉と同等の手法を示す。他の2枚は一方が2枚、他方が4枚の板材を本実刳で接合する集成材で、端喰はなく横桟と八双金物の釘跡がある。おそらく西隆寺内の堂宇に用いられていた扉が井戸枠に転用されたものと思われる。

**法華寺境内の調査（215—15次）** 薬師堂の移転と駐車場を囲む築地塀の改築に伴う調査である。前者では現在の薬師堂（1666（寛文6）年の棟札銘が残る）と同規模の前身建物を検出した。基壇は東西5.4m、南北4.5mの規模で、3層を高さ30cmに築成している。建物は三間堂で向拝はない。基壇土中に混入した瓦片から中世の建立とみられる。後者は3調査区に別れ、いずれにおいても奈良時代の築地塀（SA5580）、掘立柱建物（SB5570）、掘立柱塀（SA5573、5575、5576、5581）、道路側溝（SD5571、5572）と、室町時代の築地塀跡（SA5582、5583、5585）などを検出した。

（本中 真）



第215—15次調査遺構図



第215—15次調査位置図

1990年度 平城宮跡発掘調査部発掘調査一覧

調査地区	遺跡・次数	調査期間	面積	備考
6AAY 6ABL	平城宮 第205次	90.4.1～90.7.31	1700m <sup>2</sup>	兵部省
6AAX 6AAY	平城宮 第214次	90.4.17～90.7.21	850m <sup>2</sup>	兵部省
6AAY	平城宮 第216次	90.10.4～90.2.26	2500m <sup>2</sup>	壬生門北方
6ABD 6ABP 6ABQ	平城宮 第217次	90.7.5～90.12.12	2985m <sup>2</sup>	第一次大極殿地区
6AAY	平城宮 第220次	91.1.8～91.4.4	1500m <sup>2</sup>	式部省
6ADA	平城宮 第215-6次	90.8.9～90.8.18	85m <sup>2</sup>	平城宮北面大垣
6ALD	平城宮 第215-7次	90.8.21～90.8.25	42m <sup>2</sup>	東院地区東辺
6ASB	平城宮 第215-9次	90.9.10～90.9.11	7m <sup>2</sup>	平城宮北方遺跡
6ASA	平城宮 第215-10次	90.9.18～90.9.21	12m <sup>2</sup>	平城宮北方遺跡
6ASA	平城宮 第215-11次	90.9.25～90.9.26	12m <sup>2</sup>	平城宮北方遺跡
6AAO 6ABA 6ABB 6ABN 6ABO 6ACA	平城宮 第215-13次	90.10.17～90.1.25	118m <sup>2</sup>	内裏北方官衙・大膳職地区
6ASC	平城宮 第215-17次	91.1.9	15m <sup>2</sup>	平城宮北方遺跡
6BSR	平城宮 第212次	90.5.7～90.6.19	600m <sup>2</sup>	西隆寺旧境内
6BYS	平城京 第218次	90.7.5～90.8.25	700m <sup>2</sup>	薬師寺講堂・北面回廊
6BSR	平城京 第219次	90.11.16～90.11.23 91.1.22～91.3.29	1030m <sup>2</sup>	西隆寺旧境内
6BSR	平城京 第221次	91.1.22～91.3.14	585m <sup>2</sup>	西隆寺旧境内
6AFE	平城京 第215-1次	90.4.3～90.5.11	320m <sup>2</sup>	左京二条三坊六坪
6AGA	平城京 第215-2次	90.5.15～90.5.23	200m <sup>2</sup>	右京一条二坊四坪
6AFI	平城京 第215-3次	90.6.19～90.7.12	430m <sup>2</sup>	左京三条二坊九坪
6AGF 6AGG	平城京 第215-4次	90.7.7～90.7.13	142m <sup>2</sup>	西一坊大路
6AFB	平城京 第215-5次	90.7.26～90.8.8	95m <sup>2</sup>	左京一条三坊二坪
6AFA	平城京 第215-8次	90.8.27～90.9.10	250m <sup>2</sup>	左京一条四坊三坪
6AGA	平城京 第215-12次	90.10.15～90.10.17	16m <sup>2</sup>	右京一条二坊二坪
6AGA	平城京 第215-14次	90.10.22～90.10.25	25m <sup>2</sup>	右京一条二坊二坪
6BFO	平城京 第215-15次	90.10.29～90.12.6	205m <sup>2</sup>	法華寺境内
6AFI	平城京 第215-16次	90.11.21～90.12.26	400m <sup>2</sup>	左京三条二坊四坪
6BFO	平城京 第215-18次	91.1.16～91.1.17	17m <sup>2</sup>	法華寺旧境内
6AGA	平城京 第215-19次	91.2.25～91.2.26	10m <sup>2</sup>	西一坊大路
6AFC	平城京 第215-20次	91.3.12	18m <sup>2</sup>	左京一条二坊十坪